

## 幼児の心理と教育

〈1〉

はじめに

編集部から筆者に与えられたテーマは「幼児の心理と教育」という観点から「幼児教育の現場の発展のために」である。筆者は発達心理学、特に幼児の心身の発達を研究の中心として少し仕事を進めてきたが、「発達と教育との結びつけ」ということに以前から関心をもっており、これを自己の将来の最大の研究課題であるとさえ思っている。

最近とみに幼児教育の重要性が主張され、家庭教育は勿論のことと集団保育の価値が認識されるようになり、保育の科学化、現代化の声を耳にするようになってきた。筆者自身も発達心理学者の



### 幼児教育の現場の発展のために

——領域「健康」について——

田中敏隆



立場から一昨年大阪学芸大学附属幼稚園の教育課程作成の一員として参加し、目下大阪府教育委員会の大阪府幼稚園教育課程の作成に取り組んでいる。これらから得た幼児の集団教育の実際的な面と、発達心理学の研究から得た幼児観と、さらに、一年間文部省在外研究員として英国の幼児教育を心理学的な観点から得た知見を基にして、与えられたテーマに対して前後三回にわたって答えてみたいと思う。

幼稚園教育要領は、徳性の育成に重点がおかれているようにとらえられているが、なるほど幼児の発達特徴からみると、この時期に徳性の基盤が最も形成し易いようで、この時期を逸すると後でとりかえしがかなり困難であることも理解できる。しかし、幼

児の集団保育は、他の領域を軽視してもよいのでなく、六つの領域の力動的な実践によって全人教育をめざすことが肝要である。そこで、六つに区分された領域の内容の指導が、全人教育として幼児の発達にどのような役割を果すものであるかを中心にして述べてみることにする。

### 一、健康に関する幼児の特徴と指導

#### 体の発育

身体の発達状態を知るために身長・体重・胸囲の三つの指標がある。特に、体重は、発達の著しい幼児の健康状態を知る一つの目安になる。体重の増加が停滞しているようであるならば、親に連絡して一度医師に健康診断させてみる必要がある。ここに、幼稚園、保育所では、毎月一回身体測定を行なう所以がある。

体の発育について、最近問題になっている身体の発達加速現象に関しては、その多くは、学童期からのものである。しかし、七歳児では、かなりの加速度現象がみられることからして、すでに幼児期にもこの現象が存するものと考えられる。

#### 体型の変化

年齢の推移によって体型は変化していく。年少児ほど、頭部が身体の他の部分に対する割合が大きい。たとえば身長と頭高との割合を比較すると、三、四歳児は五頭身であり、五歳児では六頭身になってくる。このために五歳児になると、重心の位置が三、四歳児に比べて下にさがってくる。このことは、五歳児では活動的な遊びにおいて、ころぶことが少なくなってくる。また、三、四歳児に、巧緻性を要求する運動は、困難であることを示すものである。したがって指導計画では、三、四歳児には素朴な全筋的な運動を含めるようにし、五歳児には、全筋的な運動に正確性・敏捷性、巧緻性などを要求する運動要因と小筋的な運動要因を逐次含めていくことが、身体発達に即した体育遊びである。

#### 脳の発育

脳の発育は、六歳児頃までに急速に行なわれる。人間の身体発育は、頭部から尾部にかけて行なわれる。胎児においても身体の形成は、脳からはじまり、また、誕生後においても、四肢の運動が統御されないうちに頭の統御がなされるといったように、成熟的に脳部の優位性がみられる。時実利彦氏によると、脳の細胞の数は一四〇億あり、白痴や精神薄弱児では数は非常に少ないが、普通児と天才児ではこの数に変わりがない。この脳細胞は胎内で

き、一生涯を通じて増減しない。それで、脳の重量が増加しているときには、脳の中でどんなことが起っているか。それは、脳細胞からどんだん突起が伸びて、まわりの脳細胞から伸びてくる突起とからみ合いが複雑緻密になってきている。このからみ合いが完成するのが、脳の重量の完成と同様に二十歳頃である。

このからみ合いが六歳児頃までに急速に発達し、人間の知能とともに性格の方向性をもぎざみこんでいくのである。このことは、人格の基本的なものが幼児期にでき上ることを示している。このために、脳の発育の顕著なこの時期に十分に栄養価のある食物を与え、そして、幼児期の子どもに望ましい生活経験を発達上の特質に應じて与えることは、脳細胞から伸びてくる突起のからみ合いを、緻密に、精巧に形成させることになる。それではいったい脳の発育を促進させる栄養として何がよいのか。これには、好き嫌いのない子どもにすることは論をまたないが、新鮮な魚、ビタミンの多い野菜、新鮮な果物、肉類と乳製品を豊富に与えることが必要である。英国人は、日本人に比してカロリーを多くとっており、特に、肉類と乳製品の摂取量の多いことは、驚くばかりである。これは、子どもの場合も同様である。しかるに、英国では幼児児童の肥満型が日本よりも遙かに少ないのは、いたるところに子どもの遊び場があり、栄養と運動のバランスをうまく保って

いるためであろう。

このように人格の基礎になる脳の発達からしても、西洋人に比して劣らない強じんな体力を育てる意味からしても、その基礎年齢である幼児の栄養についてもと科学的にメスを入れる必要がある。かかる意味からして、幼児の集団教育においては、給食問題を真剣に取り上げ、この面から全人教育としての幼児の発達を促すことに関心を向ける必要がある。

### 排泄の習慣

これは、領域「社会」に属するともいえるが、領域「健康」とも関係があるのでここで取り上げた。

一般的に、大小便は三歳児になると一人で処置することができるようになるが、しかし、遊びに夢中になっているともらしたりすることももある。このことは、四、五歳児になると非常に少なくなる。とにかく、幼児期において一人で手洗いにいき、一人でお尻をぬぐえるようになるから、この時期に便所をじょうずに使えるように教育することが肝要である。洋式の便所は、早くから一人で排泄できるような構造をもっているために、英国の子どもは、日本の子どもに比して、一年ほど早く、この面の自立性が確立してきているようである。

## 食事の習慣

食事の作法は、人間の品を示すものである。そのために正しい食事のしかたを身につけることは、一応ひとりです事できるようなになる三歳児から、教育することが大切である。そして、正しい食事のしかたとか、食べ物の好き嫌いをしない習慣は、幼児の期間中に形成されるようである。

英国においては、人間教育の一つの面として食事作法が重視されている。学校給食は、食前と食後にラテン語のお祈りがあり、食事中は、互に隣り合い同士が小声で話し合いながら楽しく食べる社交的な意味をもっている。幼児には、話し合つて食べることは無理であるが、楽しい食事の雰囲気が出るよう十分に考慮されている。特に、学寮における大学生の食事には、全員が黒いガウンを身につけていることを考えると、英国の学校給食のねらいは、どこにあるかよく理解できる。

ある保育学校を見学した際に、他の子どもがすでに午睡の時間に入っているのに、一人の子どもだけが食事していた。その理由を先生に尋ねると、「入学して、今日でちょうど一ヵ月目であるが、わがままで、好き嫌いが多くて食べ残す悪い習慣がある。これを許していると、健康上からも、また、性格形成の上からも本人の

ためによくないから、是非とも今のうちに矯正するのだ」とのことであった。

このように、集団保育においては、正しい食事のしかたと好き嫌いをしない習慣を身につけるように努力することが必要である。

### 安全に関する認識

三、四歳児頃は、見るものがすべて珍らしく、危険なものもあぶないということがわからない。そのために、それに近づいたり、手に触れて探索したりする。また、手足が一応の自由を獲得するために、あっちこちに出かけ、時間観念、距離観念がないために、気のおもむくままに歩き回る。幼児の行くえ不明、交通事故、ため池・野つぼにはまって死体となっていることがしばしば新聞に報じられているが、たいていこのようなことから起つている。この年齢では、何が危険であり、どこが危険であるかわからない。自分の意志どおりに危険を感じず行動するから、その都度、危険なものに近寄ったり、危険な場所で遊んだりしないうちに、この年頃から習慣づける必要がある。

五歳児になると生活の行動範囲が広くなり一人で行動することが多くなる。しかし、交通事故が五、六歳児頃に一番多いことに注目しなくてはならない。これは、一人で登降園したり、一人で

遊びに出かけることによるためである。往来・交差点・大通りを横切るといった場合の歩き方の注意は、いつも実地的、具体的な状況のもとで、反復して指導し、信号機の見方もこの時期に反復して指導すると、それらに対する適応性が身につくものである。

英国では、保育学校と幼児学校において教具として交通知識に関するものが多く準備されている。そして、具体的場面を設定して交通安全についての教育が行なわれている。英国で感心した一つは、車道があれば必ず歩道があることである。そのため、歩行者が自動車によって死傷させられることが非常に少ないのである。もう一つは、保育学校・幼児学校・下級学校といった幼児と児童の学校の校門前に大道がある場合とか、子どもが登下校の際よく利用する信号機のない横断歩道には *zebra* の立札をもった子ども愛護の大人（地方自治体の職員）がいて、子どもを交通事故故から守っている。これらのことについて、日英間にかんがりの相違があるが、それを両国の経済力の相違によるものとしてしまえば、それまでであるが、英国には、人間尊重の精神が強く支配していることにわれわれは目を向けなくてはならない。

## 運動能力

人間の発達、遺伝と環境の相互作用によって行なわれるが、

しかし、能力によっては、より遺伝が強く参与するものと、より環境が強く参与するものがある。運動能力の発達には、確かに遺伝的要因が強く作用する。だからといって、環境的要因を軽視してもよいわけではない。特に、発達が急速で、身体の柔軟性に富んだ幼児期に、運動神経を促進させる環境を与えてやると、運動技能に必要な脚・腰・腕の強さ、敏捷性・巧緻性・正確性は、向上発達するものである。大阪の Y M C A で運動能力の劣っている幼児と児童に対して、体育教室を開いているが、子どもはみな運動能力に劣った者同士であるため、劣等感をもつことなく、実に快適に体育遊びに熱中する。期間は半年であるが、その効果はかなりあらわれ運動技能が上達し、同年齢の普通児程度になるものが多い。これも、年齢が若いから環境的效果が強くあらわれるのである。

また、これとは逆に遺伝的に素質をもっている、活動的な遊びが極度に制限されてしまうと、せっかくの素質も伸びないで終ってしまうことになる。このようにみると、幼児期は運動能力を伸ばす絶好の時期であり、将来高度の協応した技能の基礎を身につける理想的な年齢である。幼児は、「よくもあのくらいとびまわって疲れないものだね」と大人が驚くほど活動的に遊び、そして、成功するまで何回も反復する。しかも、遊び場面では冒

険的であり、怪我に対する恐怖心とか、人にみられているといった恥しきの意識も比較的少ないから、運動技能が著しく進歩する。ここに指導計画に活動的な戸外遊びを豊富にとり入れる必要がある。日本のように紫外線に恵まれた国では、太陽の有難さは身にしみていないようであるが、英国では、冬を除くと、太陽のでている時の体育遊びは、男女児とも上半身は裸で、紫外線をとるようにしている。

幼児の時は病気がちでも、成長とともに病気を忘れてしまったと耳によくするが、そのような人の多くは、真に体力をもっているかどうかは疑問である。幼児において必ずかかる病気は別として、戸外遊びできた体は将来においてすぐれた体力の特主になる傾向が強いのである。そのような人の中から世の中に偉大な業績を残す人があらわれてくる。この意味から幼稚園・保育所では、幼児用の運動器具を準備し、晴天であれば、体育遊びは戸外でさせることが大切である。

幼児期は、大筋運動から小筋運動に移る過渡期にあたる。そのために未だに、全身あるいは大きな関節、または、大きな筋肉を動かす第一次的基本運動が支配的である。そこで全筋的な運動である、走ったり、とんだり、高いところに登ったり、とび降りたりする活動的な遊びを好む。そのために、指導に当っては、年少

児ほど全筋的な運動遊びを多くし、運動器具を使用する際にも全筋的に運動できる内容にし、年長児に移るにつれて、小筋的な運動を要求する活動内容を逐次増していくようにすべきである。また、運動の基礎能力が形成されるこの幼児期に、正しい歩行と正しい姿勢の指導を行なうことも成熟にかなった教育である。

幼児の運動能力に加速度現象は認められるであろうか。この点についての資料を筆者はもちあわせていないが、児童期の資料から推定すると否定的である。現在児童・生徒の体力の低下が問題になっているが、これは身体の加速度に対して運動の加速度がなく、この両者の不均衡によるものである。体力の低下はおそらく幼児期から発生してきているものと考えられる。このような意味からも幼児の戸外の体育遊びが重要視されなくてはならない。

以上「健康」に関する発達上の特徴と指導についての概略を述べてきたが、「健全な精神は健全な身体に宿る」という諺のごとく、人間の幸福の第一は、なんといっても健康であるということである。筆者が、英国の高校生に「貴方の望む幸福は何か」と尋ねると、「いつも健康でありたい」といった返答が非常に多かったのである。その健康の基礎は、幼児期に形成されることを考えると、全人教育の中に含める領域「健康」の役割がよく理解できるのである。

(大阪学芸大学)